
姉妹と静けさと音

うゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉妹と静けさと音

【Nコード】

N9951F

【作者名】

うゆ

【あらすじ】

軽音楽部である私、野宮和枝のお送りするグループ内の恋の行方の物語。

第1話..1枚の詩

私は今高校生なんだけど、そんな学校生活を送ってる中でとても生きがいに行っていることがある・・・

それは、今部活の軽音楽部で活動している私たちのバンドだ。

私はボーカルで双子の妹とデュエットしてるんだけど・・・あ、えっと、で、やっぱり双子って事で一卵性双生児ということなので、同じを恰好をしたりすると見分けがつかなくなるから、今ではずいぶんと違う恰好をしている。

それで話を戻すと、他のメンバーには普通のバンドみたいにドラムとギター、まあアコースティックなんだけ

どね。それとドラム、ベース、キーボードって事になってるんだよね。んで私がボーカル兼キーボードって訳。

さつきデュエットって言ったけど、ほとんどが妹主体で私はコーラスだけなんだよね、たまーにメインで歌ったりもするんだけどね。

そして私たちが活動の拠点としているライブハウス『双葉』では、みんながお金を出し合って練習をしている。

なんかもう長いこといるせいか、お得意さんになっちゃっている。

ちよくちよくそのミニライブなんかにも出させてもらって、友達

に聞くとファンも出来ているらしい。

機材的な面では、みんな必死にバイトして各自いい楽器を手に入れた。

私のキーボードは結構値が張ったので、自給700円の微妙な収入を必死に貯めていった挙句やっと買った代物だ。

中には、ギターを手に入れるために親にせがんで借金をしてまで買った人までいる。

以後その子は、バイトを頑張って今も地道に借金を返済しているところだ。

そして一番樂をしている輩やからは私の妹の藍香あいかだ。藍香はほとんどボーカーのみということなので細かいものは買

うとしてもこれと言って高価な物は買っていないわけで、懷を痛めずに・・・とゆうか労働をせずに今がある輩だ。

まあそんなことはともかく私は今日も『双葉』さんで皆で練習する予定だ。

それと今まで言い忘れていたけど、私の名前は野宮のみや和枝かずえとゆう名前だ。昔に学校の行事だったか宿題だった

かで自分の名前の意味を親に聞いてくるといったもので親に名前の意味を聞いたところ、

『和』を入れたからおっとりとしてほしいのと、『枝』の意味とし

ては、いろいろな才能が伸びていつてほしいといった意味があるかららしい、親のその時の態度はすごい動揺が見られたからその場でどうにか考えたんじゃないかと私は思っている。

と、そんな事は置いておいて、私は今とても生きがいになっていることがもう一つあった。

それは、同じバンドのメンバーのベースを担当している藤田っていう男子に恋らしきものをしているということ。

どうも最近、藤田の奴が近くにいると気になってしまう。そんなことはライヴハウス『双葉』でもよくある。

例えば、練習中に皆で音を合わせる時があるんだけど、その時にそのいつの事を気にしているせいかな、

音が走ってダメ出しくらってしまう。まあそんな時に真剣な表情をしている彼もかっこいいとか思っちゃうんだよね。

まあそんなところで、私、野宮和枝は一人の男子の事が好きになってしまったようですね。

とりあえずそろそろ藍香と家を出る時間なので話を切り上げることになります。

じゃあ行ってきます。

「藍香ー、もう家を出るよー。早く用意をして下に降りて来ーい」

やたらと言葉に伸びが多くて、だるそうにしている姉だが、実際のところは早く『双葉』に行きたくてうずうずしていた。

「はぁーい・・・今行く、ちょっと待って」

それとは逆に妹の方は本当にだるそうな声をあげ、2階から姿を現した。

「かずえー、用意するの早すぎる。あたしもうちよつと寝てたかったんだけど」

「知らないよそんなの、今日はもう『双葉』の予約とってあって、一時間無駄にするお金もないでしょうが」

藍香は眠け眼をごしごしと手でこすりどうにか完全に起きようとしながら、入口かけてある上着を羽織った。

「よし、じゃあ行きますかー和枝」

エイエイオーとでもするかのように腕を天にかざし気合いを入れた藍香であった。

「あんたがそれを言うな、とゆうか全部藍香待ちだったんでしょーが」

「たしかにそうだったね」

まったく罪悪感がなかったかのように天にかざした手を下ろし、玄関にある自分の長い間履いている靴を何の造作も無く履き、早々とドアノブを開け外へ出ていった。

「まったく勢いはいいんだから」

そんな藍香を見ながら、和枝はぶつくさと藍香の後を追うのであった。

そして辺りは、冬のためか寒々しい風が彼女達を取り巻いていた。

遠くに見える大木も葉を散らし木だけの寂しい姿を見せていた。

「うわっ、寒い。やっぱり今日はやめにしない？」

さっきの勢いは一体どこに行ったのか、既に帰宅モードに藍香は入っていた。

「何言ってるの、帰る訳ないでしょ。とゆうか今日はキーボードは運んであるからいいじゃない」

「うー、でも運んだっていうか放置っていうんじゃない？」

機嫌を損ねたようか、皮肉った口調で藍香は言葉を返した。

「うっさい、あれは運んだって言うの」

そんな事を言った直後に和枝はこんな事を思っていた。

まあ確かに、一週間もあそこに置いておけば放置っていうのもあながち間違っていないけどさすがに気にしてる事

をストレートに言われると誰だってムツとくるでしょうが。

「あ・・・じゃあとりあえず『双葉』に行こうか」

「そうだね」

そう言って短く言葉を切った、和枝はスタスタと先に歩いていった。

そして色々とごたごたもありながらも、近くのバスを經由して、

歩いて少しの所にあるライブハウス『双葉』に到着した。

「じゃあとりあえず、中に入るよ」

「うん」

やはりこういう時は姉が強いのか、和枝が先導してライブハウスに

入っていった。

「おはよう、和枝ちゃん、藍香ちゃん」

「おはようございます、双葉さん」

和枝はそういつてぺこりと頭を下げ、藍香はワンテンポ遅れて会釈をした。

それとここ、ライブハウス『双葉』は店長の苗字をそのまま使っただけだから店長の名前はもちろん双葉だ。

「あのー、藤田君とかってもう来ていますか」

別に意識するわけでもなく、勝手に彼の名前が口に出ていた。

最近はメンバーの事をいう時になにかと藤田という名前を強調してしまう。

「ああ、もういるよ。君たちが一番最後だよ」

「あつ、そうなんですか。ありがとうございます」

軽く会釈した和枝はそそくさとみんながいる部屋へと向かっていった。

後ろでは店長の双葉さんが軽く振っているようであったが、それを見ていたのは藍香だけであった。

いつも通りにゆっくりと二人は廊下を進んでいった。みんながいる部屋に近づくにつれてギターやらドラムの音

が聞こえてきた。そして二人はいつも使っているスタジオの防音用の重たい扉をゆっくり開けた。

扉を開けるとすぐさま一人の男の声がとんできた。

「おせっせーぞ二人共、今まで寝てたのか？」

第一声を発した茶髪の長髪の男、そいつは和枝が恋愛中の彼、藤田ではなく、ギター担当の上条健かみじょうけんであった。

「寝てたって・・・寝てたのは藍香で私は起きてたから」

「じゃあさっさと起こして来いっての」

「違うよ、和枝が寝てたんだよ」

すかさず藍香が嘘の訂正を流した。

「違うでしょ、藍香が寝てたんでしょうが、というか私は早く起こしたよ」

「分かった・・・とりあえず黙れ」

そんな事を言っている彼だが、実際はこの中で一番練習熱心でほんとは仲間思いである・・・たぶん。

「まあ、そんなことゆうなよ上条。じゃあとりあえず二人とも自分の準備でもしてくれ」

そう、これが私が今とても気になっている彼、ふじた なおき藤田直樹である。

「お、おはよう藤田君。今日も頑張ろうね」

少し動揺気味ながらもなんとか返事を返せた和枝であった。

そして彼女は藍香に放置してあると言われた、2段式のブルーのキーボード引っぱり出した。

正直値が張っただけに、機能は充実しているし、音は良いということなので自慢のキーボードだ。

「そんじゃ、このあと合同練習するから二人はすぐにでも出来るようにしといて」

「あいあいさー」

適当に返事をする藍香をしり目に和枝は指を慣らしていった。

そういえばドラムの紹介をするのを忘れていた、ドラムの担当は私の親友でもあるあまの さつき天野咲だ。

なんでドラム担当になったのかというと、一番最初の段階のメンバーの中でずば抜けてリズム感が良かったからだ。

裏話をするとならドラム志望の人がいなかったからというのもある。

しかし、音楽に関しては天性のものを持っている・・・気がする。

「じゃあそろそろ合わせますか」

上条は気合いの入った声でそう言い、周りを活気づけた。

「了解」

活気づいたスタジオ内は外が冬という事を忘れさせるほど熱気で暖まっていた。

私たちのバンドは何故か上条がアコースティックギターを買ってきたためロック系が出来なくなってしまう

ゆったりとした、バラードが中心となっている。

それで、アコースティックを買った本人は皆にそれを言われたためにいつの間にかものすごく上達していた。

最初はコードのFが弾けないと嘆いた彼であったが、今ではかなり難しいアルペジオでもこなせるようになっていた。

そして話は戻るが、そんなバラード系の歌主体でやってる私達であるけど、その曲はカバー曲だけでなく

自分たちのオリジナル曲もある。大概のオリジナル曲の詩を書いているのは、藤田であった。

そしてそれに私と上条と天野が演奏をつけて、妹の藍香がそれに歌という命を吹き込んでいるわけだ。

そんな感じで、プロと比較したら大したものじゃないけど、自分たちでも曲を作っている。

ほとんどの曲はドラムが出だして一定のリズムを刻んでいて、その後にギターとベースが入っていくのが主体となっている。

そして私のキーボードはちょこちょこ曲入ったりとか、出だしから曲に参加するなどいろいろな形で役立っている。

もちろん私は、藤田のベースラインだとか歌の歌詞が気に入っている訳で、それとかもあって彼の事が恋愛対象になったんじゃないかと思っている。

「よし!!今日はこれで上がりかな」

元氣よく藤田が終了の時間を告げた。

時計を見るとちょうど12時に差し掛かろうとしていたところであった。

「そうだな、今日はこれで終わりだな」

続いて上条もエレアコのシールドの先にあるアンプの電源を落としてギターをケースにしまい始めた。

皆が一斉に片づけに入っていた。

そんな中、藤田が急にドアを開け外に出ていった。そしてなんと私を手招きしていたのであった。

♪

「え、え？ 何藤田君？」

完全に動揺しきっている和枝は、今周りから見たら唯の変人であろう。

「えっと・・・その、この前さ、詩を作ったんだけどこれ皆で音つけて、みやが歌ってみない？」

「ふえ？・・・ええ〜〜！？・・・私でいいの？」

ありえないといった表情の和枝はいつものドキドキはどこにいったのか、藤田に迫った。

「うん、たまにはみやがソロで歌ったたらいんじゃない？ 演奏の方は皆が頑張ればいいものが出来ると思うし」

「・・・うん、頑張ってみるね」

そして二人は皆がせっせと機材を片づけているスタジオに戻ってい

った。

どうしよう、私あんなもの頼まれてしまった・・・私にはたして歌うことは出来るのだろうか？

けど、まだ歌詞とか見たわけじゃないから、できないなんて分かんないもんね。

とりあえず藤田君の期待に応えられるように頑張らなくちゃいけないのかな。

そうだよね、前向き考えれば平気だよね、ポジティブシンキング、ポジティブシンキング。

そして片づけを終えたメンバーは店長の所に退出のあいさつをしに行くところであった。

「双葉さん、もう上がります」

そう言うのと、奥の方から双葉さんがそそくさと出てきた。

「ああ、まいど今日もお疲れさん」

店長のその言葉の後、5人はお疲れさまでしたときまったように言

い店を出ていった。

「そんじゃあ、今日はこれで解散」

上条の言葉で皆が一斉に家に帰っていった。

家への帰宅途中のバスの中、人がまばらになってきたバスの中で出来れば聞かれないことを藍香が尋ねてきた。

「そうだと枝、さっき藤田になんて言われてたの？」

「え？ えっと・・・それは」

もじもじとして答えようしない和枝を、藍香の鋭い一閃が突き抜けた。

「もしかして、曲を作ってくれて言われたの？ それとも付き合ってた？」

藍香が最後まで言い終わらないうちに、和枝がものすごい勢いで口を塞ぎそれを止めた。

「おまえ！ 最初の方は大体あってるとして、つつつ、つ、付き合っ・・・てとか」

「和枝、声でかい」

藍香の宥めるようなその声で我に返ったのか、周りを見渡すと怪訝そうにこちらを眺める人があちこちにいた。

和枝は先ほどの失態からか、声をひそめた。

「ごめん、で、藤田君に言われたことはボーカルやってみないか？
って言われたんだよ」

「へえ・・・で、それを承諾したと」

そう言いながら目で問い詰めると、藍香はしよぼくれながらも、うんと頷いた。

「まあ頑張りなよ、私も手伝うから」

「そうだね」

「あ、でもそれは付き合うという事を前提に頼んだのかな？ねえねえ？」

「うっさい！黙れ」

乗客たちは、お前が黙れと言った表情で和枝を凝視していた。

そんな話をしながら二人で笑いながらも、バスは冬の景色を突き進みながら家の方向へと帰っていくのであった。

第1話：1枚の詩（後書き）

試験がとても近いので更新は遅いかもかもしれません。

それと、一応4話程度で話を終わらせる予定でいますので、

ここまで読んでくれた方は次回も読んでくれると嬉しいです。

第2話…曲作り

そんなこんなで藤田君に曲作りを任された私なんだけど、一体どうすれば…

とりあえず藤田君から渡された、歌詞が手書きで書かれた一枚のメモ用紙を見てみたんだけど、

そこにはいつもみんなでワイワイ書いているのと少しずれた恋愛系の歌詞が書かれていた。

やっぱり歌詞って歌に乗せてメロディとして聞くといい曲だなあと
思うけど、歌詞だけみると、なんていうか、とても恥ずかしい
文みたいに見えるんだよね。

それで歌詞の内容としては、ある一人の女の子と男の子がいて、その男の子はその女の子の事が好きなんだけど、

なかなか踏み出せなくて片思いに終わっているんだけど、ある日にやっと思いを伝えることが出来て

やっと付き合い始めてこれからよろしく、っていう感じの内容かな？私の解釈だとこんな感じなんだよな、

人によっては違う解釈もあるかもしれないけどさ。それでこれは裏話なんだけどこの歌詞を部屋で見てて、

その歌詞の中の登場人物を私と藤田君に当てはめてたら…恥ずかし

くてなんか顔を枕にうずくめちゃった訳ですよ。

そんなこんなでこの歌詞に演奏をつけていこうと思います。

「・・・・・・・・ね・・・・いて・・・・・・・・かず・・・・」

「ねえ？聞ってる？」

「えっ？あっ？何？」

咲のその言葉で私はさっきまでファミレスで彼女と曲作りについて話していたという現実に戻された、

咲が何回も私に話し掛けていたということはどうやらずいぶん長い間、思想に耽っていたらしい。

「一応聞いておくけどさ、今の話聞いてた？」

「ごめん、聞いてなかった」

私は完全に彼女の言うことを聞き流していたらしく、これといった事が全く頭に入っていない。

そして場に嫌な空気が流れる。

「どうせまた、藤田君のことについて考えていたんでしょ」

一瞬咲が何を言っているか分からず固まったが、√2秒後に頭がフル回転。

「ち、違うよ!・・・なんで皆そっちに持っていこうとするかなあ」

「ごめん、ごめん、とりあえずお客さんがうるさそうにしているから声のトーン落としてね」

「あっ、ごめん」

前にもあったような事が繰り返された。つまりはデジャビュ。

「じゃあとりあえずさっきの事を最初から話すね、めんどいけど・・・まあ曲作りの事なんだけど和枝はどんな感じのテンポの曲にしたいの?。」

穏和な彼女は何も聞いていなかった和枝に対して怒ることもなく、また一から話を始めてくれた。

それはそうと、彼女は普段は穏和な性格で大声で叫ぶ事や、体を思いつきり動かすとかはないんだが、

ドラムスティックを持っていざ演奏に入ると急にキャラが変わり、細くて華奢な体からは想像できないようなパワフルなプレイをする、曲によってなんだけどね。

「テンポねえ、私はやっぱりバラード系のゆったりとして感じのや

つがいいかな」

その間に咲は、目の前にあったジュースを飲みほしていた。

「へえ、じゃあとりあえずその歌詞のメロディを考えて、それにドラムをつけるか」

咲は、指先をクロスさせドラムを打つような姿勢をとった。

「じゃあゆつくりメロディを考えるかなー」

「そうだね、それはそうと和枝くジュースおかわりする？」

彼女は空になったプラスチック製のコップに入っているストローをカラカラさせて、

咲とテーブルを挟んで向かい側に座っているイスから立とうとしていた。

「あ、じゃあするわ」

「何飲みたい？」

「んー、じゃあジンジャーエールで」

「うん」

私は手元にあったコップを横に立っている咲に渡した。

そう言うと、咲はジュースを補充しにドリンクコーナーへと消えて

いった。

「曲作りか・・・」

私にボーカルは務まるんだろうか、周りは和枝ならできるよとか言ってるけど本当に平気かなと思う時がよくある、

私なりにはいつもボーカルをやっている藍香がハマリ役なんじゃないかと、歌詞見ながら藍香がそれを歌う姿を想像した。

そんな事を思っている間にも、咲が冬だけに氷の入っていないジュースがなみなみと入ったコップを持ってゆっくりとした歩調で近づいてきていた。

「持ってきたよ」

そう言いながらコップをゆっくりとテーブルに置き、咲は椅子に腰を降ろした。

「そういえばさ、なんで藤田君は和枝に曲作りを頼んだんだろうね？」

咲が掛けている眼鏡が一瞬キラッと光ったように見えた後、彼女は意味深な表情を浮かべた。

「さあ、なんでだろうね」

私に至っては、そんな事は全く考えてなかったなのでその事については深く考えていない。

「もしかしたら・・・もしかするかもね」

にやついた笑みを浮かべながら咲がそのことの真理についてを語ろうとしているようであった。

「いや、そういうことはないと思うな・・・っていうかまたそれか」

「またそれだよ、しつこいだろ。だけど意外と気があったりするんじゃないの？」

咲の表情は一向ににやついたままだ、それと彼女は歌詞を書いた本人が私の事が好きなんじゃないかと見立てを立てているようだ。

もしそうだったらすごいうれしいんだけど、そんな本みたいな展開は期待できないので、

もちろん自分の中ではその考えは却下されていた。

「たぶん違うと思うな、だって藤田君は誰にでもやさしいし・・・」

「確かにねえ、彼本当に誰にでも優しいんだよね。なんていうかみんなに平等っていうかさ」

あんな事を言ってきた彼女であったが、最終的には考えていることは一致していたようだ。

「そうだよね・・・」

ちなみに言っておくと私の親友である彼女、天野咲は私が藤田君に思いを寄せているということは見ての通り知っていて、

たまに相談などもしている。よく会う場所は場所はどちらかの家かで、ここ行きつけのファミレスとかでは主^{おも}に相談をしている。

こういった事では彼女には本当にお世話になっている。

そして彼女は私が藤田君と話しているとよく、先ほど浮かべていたようにやついた顔をしながら横目で見てくることがある。

「まあとりあえずそういうことは抜きして、曲作りを頑張ろうか」

こういった切り返しが早いところも彼女の売りだ。

「そうだね、とりあえず自分で考えてみたり皆と相談したりしながらやってみるよ」

テーブルにぽつんと二つ置かれているコップは、外は寒いというのに室内で暖房をつけているためか、表面上

を水滴が滴り落ちコップに纏わりつきながらも確実にテーブルを濡らしていた。

「ここってこんな感じで音を上げればいいかな？」

目の前にあるキーボードで自分の思い浮かんだ主旋律を奏でながら

周りにいる藍香と咲に問いかけた。

「んー、・・・それじゃあサビで高音に入る時に、なんていうかズレた感じで移らない？」

隣に座っている藍香が彼女なりの修正点を言った。

「たしかにね、自分でもそう思ったけど・・・やらなきゃ損な気がするし、これで当たりだったら良かったんだけどな」

和枝は直も色々なメロディを頭の中で考えふと思ったメロディを感じて弾いていた。

「あ、そうだ、こんなとかどうだろう？」

横に座っていた藍香がキーボードに手を延ばし、和枝とは違った旋律を奏でた。

「結構いいんじゃないかな、咲はどう？」

咲が賞賛の声を顔が同じであるもう一人の私、つまり藍香に浴びせた。

「そうだね、けどなんかあ・・・その歌詞をちよつと変えて音をもうちよつと減らしたらどうかな？」

「うー、和枝は厳しすぎるよ。咲だってOK出してるからいいじゃんか、この中で一番センスがいいのは咲だし」

その直後二人の後ろに立っている咲はにやついたのかは分からない

が照れていた。

「そう？ありがとね。まあ全員の意見が一致したらでいいじゃん、それとまだ野郎にとにかく言われるよりマシでしょ」

「あ、確かにね」

それもそうだといった感じで藍香は自分の音の世界に戻っていった。そういった色々の意見を聞きながら今回の曲をどんどん作り進めている私達。

いつもながらこういった作業に関してはまったく妥協は許されないのである。

ましてや人様に見せることもあるために、一曲を作る時は悔いを残さないようにいつでも真剣である。

このような作業を時間をかけながらやっていき、何週間がたった辺りでやっと私たちが思い描いたような旋律を作り出すことが出来た。

あと残すのは楽器隊の演奏のみである、といっても私はボーカル兼キーボードということなので演奏の方も考えなくてはならない。

またボーカルのみの藍香は今回はメインではないのでとりあえず現段階で出来上がった旋律のハモリのパートを作っている最中であつた。

主旋律が出来てしまえばハモリをつけるのは主旋律作りと比較する

と大したことはないので今は一人で作っている。

今日は何故皆が張り切って『双葉』にいるかというところ、各自考えてきた演奏のお披露目会みたいなのをするためだ。

つまりそこで皆で相手の修正点を述べたりして、意見を取り入れながら自分の所を改善したりするのだ。

そして一人一人が和枝のキーボードで弾くメロディに乗っかって演奏することになっている。

「と、まあこんな感じなんだけどどうよ？」

上条が所々アルペジオ混じりの感じで主体がバックイングの演奏を皆に披露したところだった。

昔を思い返せば本当にうまくなったんだあと近頃よく思う。

「結構良かったよ、まああとはソロを入れるか入れないかだね」

上条は、藤田から意外にも高評価を貰えたせいか、きつい顔をしているようであったが顔がほころんでいた。

「来たよソロ・・・まあそれは後で考えるわ」

次は私の番なんだけど私が主旋律を弾く役だから必然的に歌いながら弾き語りみたいな感じでみんなに聞かせなければならぬ。

正直まだちゃんと出来上がっていないものを歌うのは気が引けるが、どうにかここはやらなければいけないらしい。

「こんなんですけど、どうでしょう・・・」

急にかしこまったような態度で皆に感想を聞いた。ライブでも緊張はするけどこっちの時のが下手をすると緊張するかもしれない。

「いいじゃない？」

ドラムでスタンバっている咲が嘘か本音かそう洩らした。

「ほんと？あんまり自信なかったんだよね」

「いや、結構良かったよ、歌も良かったしね」

藤田君が笑いながら私が気にしていた歌の事を褒めてくれた。

「ありがとう」

私はそう言われた瞬間うれしさのあまり飛び上がりそうになったが、そういった事は今はできないと分かっているので、

とりあえずは胸にそれをしまいこみ『ありがとう』と、一言伝えた。

その後咲がドラムを叩いたが、彼女のあまりのセンスの良さに皆が
いい意味で声を失った。

このメンバーの中では確実に群を抜いて彼女が最もそういった才能
持っている事はこの中の全員が分かっていた。

また藤田君も演奏を披露したがこれといった問題点は見つからなかった
ようなのでとりあえずはギターのソロ入れるか入れないのかと
いう話に変わった。

「とりあえず話をまとめるとよ、ソロは2回目のサビが終わった辺
りで入れて、

そのソロの感じはサビのメロディに少し手を加えた感じのやつでい
いんだよね？」

「そういうかんじかな」

ソロの内容を決めたのは上条自身であったが、ソロをどのタイミング入れるかは私たつての希望だった。

何故かというとその辺で休憩を入れておかないと私自身がとても疲れるからだ。

なんたつて今回の曲はサビでの盛り上がりを重視してか、サビでかなりきつい高音が続くからだ。

この後皆でソロの事について上条が弾きつつも考えていたが今日中には無理なので、

ソロは上条の家での宿題といった形になった。ちなみに宿題と言った方は私の妹の藍香である。

「おまえらこれでいいだろ！！結構今回は自信あるぞ」

弾き終えた上条は疲れ切った声でそう言った。

何故『今回は』と言っているかというところ、この数日間上条は考えたソロを皆に聴かせたのだがすべて却下されていたからだ。

今ではもうやけくそ気味になっていて次々にソロを作り出している。

「今回は“以前”よりは結構良かったよ。OK出てよかったね」

藍香は以前という言葉強調して小悪魔気味な笑みを浮かべていた。

「うるせえよ、おまえは今回大してなんもやってねえだろ！」

上条が若干キレ気味ながらも自分のソロを自慢げに弾いていた。

「失敬な、ハモリパートをつくるっていう大役をこなしているじゃないか？　というか今ミスっただろ」

藍香はもはや口調まで変化させて細かいミスをつつこんだ。

「ち、ちげえよ、アレンジだよ馬鹿野郎」

「はいはい、じゃあこんな感じでいいよな皆？」

本当にキレそうな・・・いや、泣いてしまいそうな上条に藤田は助け船を差し出した。

その言葉に全員はコクンと頷いた。さすがにこれで首を縦に振らなかったら上条が逃げ出すであろう。

「じゃあまだいまいちだけどとりあえず皆で合わせてみますか！」

変に上機嫌な上条はいつもの定位置につき皆がそれぞれに位置にくるように促した。

そしてドラム担当の咲がメンバーを先導して曲を切り出していった。

「そんじやいきますよ、ワン、ツー、スリー、フォー」

咲のいつもと違ったテンションで勢いよく各自が作ったメロディを奏でていった。

そして今回のボーカルという大役を担っている和枝は練習だけに通った声で歌詞をなぞっていった。

歌っている最中はみんな自分たちが作った曲なだけにとっても楽しそうに自分の楽器を鳴らしていた。

そして、毎度毎度曲を作り終わった後はこの
ライヴハウス『双葉』の店長である

双葉さんに最初に演奏を聴いてもらい、OKが出たら曲の完成という事になっている。

みんなで合わせた後に数々の微調整を行ったため出来具合はかなりいいと思っていた。

はたして双葉さんの評価はどうなんだろう？これがみんな今考えていることだろう。

「……いいじゃないかい？」

しばし沈黙があったが、それが長かった分だけ嬉しさがさらに跳ね上がったようにも感じた。

いつも優しい店長だが、曲に関しては妥協を許さない彼だが、今回は皆の自信作というだけあってそれ相応の

評価が店長から貰えた。

「よっしゃ、双葉さんソロとかどうでした？」

「ああとても良かったよ」

普段はそこまで笑顔をつくらない上条であったがこの時ばかりは顔全体が満面の笑みで埋め尽くされていた。

「それと和枝ちゃん、歌の方もなかなか良かったよ」

「ありがとうございます」

やはり人は褒められると嬉しい気持ちになるのかやはり全員が笑みを浮かべていた。

「ところでさ君たち」

いきなり双葉が話を切り替えて皆が一瞬キョトンとなったがどうやら真面目な話だそうなので全員が静かに双葉の次の言葉を待った。

「今度またこのライブハウスでミニライブをやるんだけどね、そのミニライブには今回はそこらでは結構名の知れてるバンドが出る予定なんだけど・・・」

君たち、その前座をやってみないか？」

5人はあまりにも急の事で最初はポカンとしていたが事の重大さに気付いたのか、驚きの声を上げた。

「いいんですか双葉さん!?!」

和枝は目を見開き、興奮気味に双葉に詰め寄った。

「ああいいよ、どうせだからその曲もやってみるといい」

全員全員頭を下げたと言った言葉はこれだった

『ありがとうございます!!』

5人とも一点の曇りもない声でそう言い、詳しい日時などを聞いた。

全員はクリスマスにサンタからとっておきのプレゼントを貰ったような顔をして5人とも別々の帰路のついた。

5人からすれば本当にそれはサンタのプレゼント・・・いや、それ以上の贈り物だったのかもしれない。

そしてどうもライブの日程は今から2ヶ月と20日後らしい、私たちはその日のために日々練習中だ。

なにを練習しているかというと、楽器隊を安定させることと、ライブでどんな感じでMCをするか等だ。

どうやら今回のMCはお調子者の藍香だそうだから、変に緊張して声が出なくなると言ったことはないだろう。

むしろ私の方が歌う時に声が出なくなるのではないのかと思う。

ライブ当日までまだ時間はあるがその日までの期間が自分たちにとってはとても短いもののように感じられた。

物事は目標があるから頑張れる訳で、今の私たちはものすごいことに挑戦しようとしているからみんなが興奮気味だ。

ましてや自分たちのオリジナルを曲を聴いてもらってそれが拍手され褒められたら絶対に顔がほころぶに違いない、

これは皆に対しても言えることだ。今私は恋愛そっちのけで練習に励んでいる。

『ねえ・・・この後私に何が起こると思う？』

それは誰にも分からない、未来はどんな地位や権力や財力を持っていたとしても見えるものではない、

だが人にはもしかしてと予想を立てるという行為は誰にでもできる。そう・・・だれにでも。

人間の性質上、なかなか固定的な見方でしか周りをを見れないのだが・・・どうだろう一歩足を引いてみれば・・・

ほら、なにかが見えてこないかい？

ふとした偶然でもそれが出来る人間は少しぐらいは先が読めるものなんじゃないだろうか。

果たして、野宮和枝にはそれができるのだろうか？

第2話：曲作り（後書き）

試験1週間前になりました。

まだまだ文が拙いですが、最後まで見てくれ方は本当にありがとうございます。

第3話：問題発生

それは、ライブを1カ月前に控えた、とても気持ちがいい小春日和の日の事であった。

私はライブまであと1カ月しか時間がないという事で、焦りの色が見え始めてきた。

そのため、私は皆との合同練習以外でも毎日練習をしていた。

周りからは『たまには休憩しな』などと言われていたが、私は自分の体調管理よりもライブでのミスが最も怖かったためか、

普段ではありえないぐらいまじめに練習に取り組んでいた。

自室で音が漏れないようにドアや窓をしっかり閉めているが、家の中にいると音が聞こえるらしく。

藍香も私の心配をしていたようだった。

だけど、私はライブ10日前までは納得がいくまで練習をやり続けるつもりでいるので、その日までは頑張るつもりだ。

「皆準備出来てるか？次いくぞ」

ギターを構えている上条は、6弦から1弦にかけて手慣れた手つきでギターのチューニングをしていた。

「大丈夫だよ」

咲が自分の喋りを演奏を乗っけるかのようにドラムをリズムカルに叩いた。

皆がそんな風に準備をしている最中、一人だけが普段とは異質な空気を纏っていた。

「ん？野宮どうした。調子でも悪いのか？」

咳き込んでいる和枝を見て、ギターのチューニングを終えた上条は和枝のもとへ歩み寄った。

「ゴホッ・・うん、まあちょっと喉がね。微妙に掠れるんだよね」

それと何故『野宮』と呼んで、藍香ではなく和枝だけが振り向いたのかというと、

上条が前から二人の事を野宮と呼んでいるせいか二人ともそう呼ばれると感覚的にどちらが呼ばれたのか分かるようになっていたからだ。

長い付き合いのせいか二人はその呼び方をあまり気にしていなかった。

そして、苗字で呼ぶのは高校生というだけあってなんらかの事情があるからかもしれない。

「そうか・・・あんま無理すんなよ」

彼は、外見や口調に似合わず意外と仲間思いのいい面があったりする。

しかしライブの際、客席から批判の声が上がるとすぐにカットとなるのがたまに傷だ。

「あゝ健ちゃんまたなんかやってる」

瞬間、藍香の言葉により顔が赤くなった。

「なんもしてねえよ!・・・つーか何ニヤニヤしてんだよ」

藍香はスタンドに置かれているマイクを指でなぞりながらニヤついていた。

「えゝ、だって健ちゃん和枝の事・・・ねえ?」

「ねえ、じゃねえよ!それよか天野に同意を求めんな、それと健ちゃんはやめろっていつてんだろ」

上条が大きく動揺した。

「そういえば天野は平気・・・だよな」

ものすごいスピードでスネアとハイハットをリズムよく叩いてる咲の姿を見ていると心配する気になれなかったらしい。

技術的に一番長けている咲はもはや、いかに客に魅せるかというレベルにまで達していた。

「もち平気だよ」

外見に似合わず軽々とスティックを振り回す姿を見ると、ギャップからか余計にうまく見えた。

「じゃあ、そろそろ合わせる？」

手でシンバルを押さえながら咲が皆に言った。

皆がうんと頷く中、ぎこちなく和枝も頷いた。

そして、咲のドラムから演奏が始まった。

その後、キーボード・ギター・ベースが加わり、音に厚みが増した。そして和枝が一番気になっている歌に突入した。

所々、藍香のコーラスが入ったりしながら曲はサビに突入した。しかしその時和枝が急に大きく咳き込み、

キーボードが不協和音を奏で、数秒の後キーボードと歌が停止した。

「どうしたの和枝、調子悪いの？」

藍香が心配そうに隣にいる和枝に言った。

「・ゴホッ・・・喉がね・・・」

そう言った和枝の喉はだれもがわかるぐらいにひどく枯れていた。

「今日は家に帰ったら？」

「そうだね、今日は帰った方がいいかもね。無理しない方がいいよ」

藍香に続いて藤田も家に帰るように促した。

「分かったそうするよ、帰ってやす・・・」

周りのみんながその声に驚いた、いやむしろ本人が一番驚いたであろう。

なぜならば和枝が発したその声は、しわがれた声で普段の和枝の声とは全く違った声であったからだ。

「あれ・・・声おかしいな・・・」

おかしいなといった表情を浮かべながらアーと軽い発声練習を行ったが、結果はあまり変わらなかった。

「おい野宮、大丈夫か？病院とか行った方がいいんじゃないか？」

一番の心配症である上条が和枝の体調を気にした。首から下げられていたギターはいち早く曲を切り上げ既にスタンドに置かれていた。

「どうだろ・・・とりあえず家帰るわ」

「和枝・・・」

自分の声を気にしてか、和枝は短い言葉で皆に今日は帰ると伝えた。全員が体調に気をつけろとかちゃんと休んでなどを言っているなか皆に笑顔を見せ、和枝はスタジオの重い扉を閉めた。

入口に行くとカウンターで店長が頬杖をついてた。

「おや、和枝ちゃん。もう帰るのかい」

何も事情を知らない店長を不思議そうに和枝を見つめた。

「ちょっと喉が・・・」

それで納得したようか、店長はその後何も聞かずにとぼとぼと帰っていく和枝を手を振りながら送った。

入口を出ると、和枝を嘲笑うかのように暖かみを持った風が長く伸びた髪をなびかせた。

和枝は家に着くと、喉の事などを親に報告し近くの病院に行くことになった。

車に乗って行くと10分もたたないうちに病院に着いた。

そして、今日は風邪の人が多いのか病院内にたくさん人があふれかえっていた。

暇な時間があつたため彼女は乱雑した雑誌コーナーから漫画の週刊誌をとりそれで時間を潰した。

20分近くすると『次の方、野宮和枝さん』というアナウンスが病院内にかかった。

彼女は乱雑した雑誌コーナーに先ほどと同じような状態でそれを置いた。そのまま医師がいる部屋を目指した。

彼女が「お願いします」と言うと、医師は彼女に口を開けるように促し、テーブルに何本も置かれていた銀色の薄い板を口に入れ、

舌をずらして問題の喉を覗き込んだ。

その後、医師は『最近無理に声を出したりしませんでしたか』など質問があり、診察は終わった。

そしてどうやら私に下された病状は【声帯ポリープ】といったものらしい。

さすがの私でもポリープという病状は聞いたことがあり、それが何を指すのかも分かっていた。

医者が言うには、早期に発見ができたため副腎皮質ステロイドの吸入療法というもので自然に治るらしい。

そのため私は少しの間病院に通うようになった。そして問題は、声を出すという事を禁止されたことだ。

今の私にはこれは苦痛の時間だった。しかし、ライブにはギリギリ治るというのがせめてもの救いだった。

だが、ライブで私の出番は来ないだろう。親が歌う事を止めると思うからである。

・・・私は、みんなの足を引っ張らないようにあれだけ歌の練習を頑張ったのに、なんでこんな事になっちゃたんだろう。

これじゃあ本当にみんなの足を引っ張ることになってしまう。

一体みんなにどんな顔をして会えばいいだろう・・・。

とりあえず、藍香に相談しよう。

罪悪感が彼女の中に渦巻いているなかで和枝は藍香に自分の喉についてのを相談した。

『ねえ、ライブどうすればいいかな』

喋ることを禁止されている和枝は紙に文字を書いて藍香と話した。

「そうだねえ、もうライブは諦めるしかないかな」

『そんなのやだよ、やりたいよ』

よほど強い気持ちなのか、文字を書く手がものすごいスピードで動いていた。

「そんなこと言ってもね・・・とりあえずは自分の喉を治す事を考えなよ」

『そんな事言っても』

文字と表情以外に気持ちを伝える手段を持たない和枝は、文字を書く手を止め俯いた。

『私だって頑張ったんだよ？ どうして分からないの？』

今まで溜めこんでいた感情が溢れ出した、それはもはや相談と呼べるような代物ではなかった。

「そんな事私に言わないでよ」

『なんでいつも藍香ばかりがうまくいって私はダメなの？』

「だから分からないって！」

和枝の理不尽な質問に藍香は声を荒げた。

『私、みんなに嫌われちゃうかな・・・』

「みんなじゃなくて、愛^{いと}しの藤田君じゃないの？和枝が言いたいのは」

『ひつどい、何が言いたいのだ！！』

和枝は紙に文字を書く殴っていた、そこには怒りの何かがぶつけられていた。

「だから和枝は大好きな藤田君に振り向いてほしいんでしょ？だから嫌われたくないんだよね」

さっきの仕返ししか、藍香は皮肉たっぷり^{ぷり}に和枝にそう言った。

『そうだよ、だからどうしたの？それが悪いの』

「悪いに決まってるでしょ、だってそのせいで和枝はよく音はずすじゃん」

いつもは絶対にこんな事を言わないのに今日の藍香は少しおかしかった。

それ以前に、和枝も和枝で声が出せなくなったことから自我を統制するなにかが外れたのかもしれない。

『そこまで言う！？・・・私知ってるんだよ！！』

「え・・・何を？」

急に話を変えた和枝に藍香は不思議そうな顔を浮かべた。

『あんたも藤田君の事好きだっていうの』

先程までものすごいスピードで書きなぐっていた文字が、急に弱々しくなり遅くなった。

「え、何の事？私別に藤田君の事は好きじゃないよ。別に何とも思っていないよ」

少し間を置き、藍香はさっきまでの態度とはうって変わって急に動揺した態度をとった。

『いつも遠くから見てるのとかはなんなの？』

和枝の文字を書く手は先ほどのまでの感情的な書き方と正反対に、機械的にただ動いていた。

「知らないよ、ただメンバーを見てるだけだよ」

『だってさ・・・分かるよ、一応姉妹じゃん私たち』

「だから違うって、違うっていつてるじゃん」

はたから見れば藍香だけが喋っている場であったが、藍香にはゆっくりと冷たい声で喋る和枝の声がしっかりと聞こえていた。

「違うんだって、ほんとに藤田君の事はどうとも思っていないんだって」

和枝の目は何かを語るかのように静かに藍香を見つめていた。

「違うんだって・・・」

動揺を隠せない藍香の声は次第に小さくなっていき、とうとう消えた。

空間を静けさが支配する中、和枝の持っていたペンが紙の上にすうっと移動した。

『いいんだよ、隠さなくても。私たちは姉妹でしょ・・・けど』

そこでペンを止めて、次の言葉を丁寧な字でゆっくり書き藍香に突き出した。

『藤田君は渡さないから』

真剣な顔をした和枝はしっかりと藍香の顔を見て目でも語りかけているようであった。

「・・・分かったよ・・・だけど和枝が言うんなら、私も言うからね」

『分かった』

その後、再びこの空間を静けさが支配したが、藍香が部屋を出たことによってか静けさが部屋の主である和枝

を慰めるように包み込んでいった。

そして私は、1ヶ月後のライブの日に声が出るようにと、しっかりと病院に通い喉のケアに専念した。

『声ってなんなんだろうね？』

どうだろうか、声というのは私が思うに気持ちを伝える一つの手段でしかない。

意外にも文字と表情だけで気持ちなんてものは伝わるものである。

そして彼女には、一歩足を引いて周りを出来ていたのだろうか。

周りが見えるという事は、見えないものもまでもが見えてくることになる。

それは良いことでもあり悪いことでもある。しかし、それを見極めるという事も大事なのだろう。

果たして彼女は正しい選択肢を選んでいるのであろうか？それとも正解の道というものは存在するのであろうか？

第3話：問題発生（後書き）

一応、こんな感じですけどどうですかね・・・
文章力が無くてスイマセン、あんまり人の感情分かんないんですよ。

とりあえずここまで読んでくれてありがとうございます。
では、次回も頑張ります。

第4話：思いの果て・・・

そして、ライブ当日。

「今日はライブだね」

藍香の向かいのいる私はマスクをしている。

「そうだね、やっとこの日が来たね」

なんとか私はこの1ヶ月間で声を出すまでには回復できていた。

「じゃあ、準備でもするか」

「そうだね」

私達はクローゼットから同じ制服を取り出して、今着ているダボついた服を脱ぎすて着替え始めた。

いち早く着替え終わった藍香は鏡で確認しながら髪をピンク色のピンで留めていた。

「今日はこの格好でいいよね？」

ピン止めが終わった藍香が私に振り向き確認をとった。

「うん、そんな感じかな」

よし、と言った風に藍香は私達の部屋から飛び出し1階へと駆け降りていった。

部屋に一人残された私、今日はライブの成功を願っているのはもちろん、ちょうど1カ月前に藍香と約束した事を実行しようと思っていた。

へたをすればバンドが崩壊するかもしれないけどここで何か行動を起こさなければいけないような気がした。

そんな事を考えていると階段をドタドタと駆け上がってくる足音が聞こえた。

「和枝、そろそろ行くよ」

私はとくに準備は出来ていたので、藍香が立っているドアまで歩いて行った。

「分かった」

階段を降りていくと、心配そうな表情をした母がいた。

「二人とも、今日は頑張ってきてね。それと和枝、あんまり無理しちゃだめよ。けど・・・」

母はそこで言葉を止め、これは言うてはいけないなと顔をして悩ん

でいたが少し間を置き口を開いた。

「けどね、ここぞって時は頑張りなさい」

たしかに言われてみれば、親としてはどうかなといった言葉であった。しかし、今の私からしてみれば一番必要な言葉のようにも思えた。

「うん、頑張るよ」

活気に満ちたような声色でマスクを着けている私は応えた。

その直後、藍香は私が最初に母に対して痛いところを突いた。

「お母さん、親としてそれはどうかと思うよ。普通は絶対無理しちゃだめだからね、

とか今日はやめときなさいよっていう所じゃないの？」

藍香の鋭いツツコミが私達の母に放たれた。その言葉に母はたじたじとした様子であった。

「まあ、いいじゃない。どうせ無理しないで、って言っても頑張っちゃうんだから」

確かに、言われてみればそうかもしれない。結局私は何を言われようが今日のこのライブには行こうとしていた。

「たしかにそうだね、じゃあ今日は頑張ってくるよ」

藍香はさぞ母に感心したように頷いた。

「よし、お母さんがそう言ってくれたから頑張っちゃおうかな」

私は意地悪気味に母にそう言った。

「あ、いや、本当はそうしてほしくないんだけど・・・まあいいのかな」

お母さん、一応私はお腹を痛めて産んだ子供でしょうが、それでいいのか。私は心の中でそう叫んだ。

「じゃあ和枝、そろそろ行こっか」

「そうだね」

私達は普段履きなれている靴を造作もなく履き、そそくさと家を出ていった。

外に出てそのまま目的地目指して歩いていったため後ろは良く確認できなかったが、

「頑張ってねー」という声が聞こえることから、確実に母が手を振っているだろう。

「おっ、来た来た、おっせえぞ二人とも」

やはり第一声を発したのは上条であった。

「ごめんね、和枝が寝坊しちゃって」

藍香が遅れた理由を私になすりつけてきた。

「えっ、違う違う、何言ってるの藍香。遅れたのには理由があって、説明するとお母さんが」

「ストップ、そこでやめろ。お前が話すと話が長くなる」

周りが笑いで包まれた。そして爆笑してるのは、私に嘘をなすりつけてきた藍香であった。

「まあまあ、あんまり笑うとみやが可哀想だよ。それと、今日みやが来れるって聞いて一番喜んだのは健じゃなかったっけ？」

藤田が周りをなだめたせいかわりは藍香一人を残してだいたい静まった。

「う、うるせえ！そんな事言ってるええだろ」

私の目からみても明らかに上条は動揺していた。やっぱりあいつはこのメンバーで一番の仲間思いのやつなんだな。

「はいはい、お楽しみのところお邪魔しますが、そろそろライブまで時間がなくなってきたんで中に入ろっか」

「そうだ、もうあんま時間ねえんだから最終確認とっとすませんぞ」

上条は咲に便乗してなんとか場を乗り切った。そして私達は逃げるように双葉へと入っていく上条を先頭に続

いて入っていった。

「いらっしゃい、ステージの方はだいたい打ち合わせ通りにセットが終わってるから、今日は頑張ってるね」

双葉さんが全員に優しく笑顔を振りまいたことにより、先ほどまで緩んでいた雰囲気之急にしまったような気が

した。優しい方が怖いってこのことなのかな？・・・いや違うか、この場合は。

「はい、今日は双葉のライブに参加させてもらって本当にありがとうございます。今日は頑張ります」

藤田が礼儀正しく双葉さんにお礼を言った。

「いいよ、そんなかしこまらないで、ほら他の皆もリラックスリラックス、力が入ってちゃんい演奏が出来ないよ。

力を抜いて楽しく出来れば、すごくいい演奏ができるよ」

「はい」

軽く会釈をした藤田とその一同は、地下に設置されているステージ

に行く階段に進んでいった。

「よし、みんな準備出来た？ 健ちゃんも準備出来た？ ちゃんとアン
プにエフェクターとかつないだか？・・・あつ、

そういえば健ちゃんはアコギだからエフェクターも何も必要ないの
か」

「野宮ああ！その事をネタにするのはやめろ。俺は間違えてアコギ
を買ったんじゃないかって、

エレキじゃなくてこっちの方が良かったから買ったんだよ。という
か健ちゃんはやめろって言ってんだろ」

藍香は悪びれた素振りも見せず、上条を無視して自分のマイクの確
認をしていた。

「俺の話聞けよ！そもそもだな、お前は」

「健ちゃん、今日はやっぱりスティック回した方がいいかな？」

咲のドラムの魅せかたの話によって上条の言葉は遮られた。

「そうだな、回した方がいいんじゃないか？・・・というかお前も
健ちゃんって呼ぶんじゃないか？」

咲と藍香はギターの上条をいじめて・・・もとい、怒らせて遊んで
いた。

そんな事をしり目に藤田君が私に話しかけてきた。

「みや、今日は調子大丈夫？あんまり無理しないでね」

もちろん私は母に言われたように無理しないでねと言われると、俄然やる気が出て無理をしよう。

「あ、うん。まあ私は歌わないでキーボードだけだから大丈夫だよ」

そう、私は今日は歌わない予定でここに来ている。だからここに来れたと言ってもいい。

「よかった、正直ずっと心配で仕方なかったんだよね」

「そ、そうなんだ」

あれ、何動揺してるの私、でも心配されてるってことだよな。

「まあ、さっきも言ったけど健も心配してたし、実際はメンバー全員が心配してたんだよね」

「へえ」

「それと、今日のライブのことだけどあの3人はあんな感じだし、きつとうまくいくよね」

「そうだね、というかあの3人は緊張という文字が全く見えないんだけど。緊張してる私がバカみたいだわ」

そう言うと、藤田君がクスクス笑い始めた。

「じゃあ、今日は頑張ろうね」

「うん」

私は心からこの時間がとても楽しかった。

「「健ちゃん」」

そんな話を話している間に二人の精神的攻撃がさらにエスカレートしていた。

「うっさい、黙れ！そろそろキレっぞ」

「えー・・・まあ健ちゃんだったら怒っていいよー」

藍香は・・・一言で片づけると、遊んでいた。

5人がこんな話をしている間にも、地上では客が集まり始めていた。

5人のいる場所はステージの舞台そで、思ったよりも全員緊張している様子はなくむしろ早くステージに立ちたいといった表情だ。

しかし、上条一人はとても疲れているようにも見えた。

「ああ・・・疲れた。ほんじゃまあ、とりあえず楽しく行こうぜ」

声を潜めるほどでもない小さい声で上条は皆を活気づけた……のだと思う。

「暗幕の隙間から客席を覗いてくるね」

藍香が足音を立てずに暗幕の隙間に向かい、客席を窺っているようであった。

『結構お客さん入ってるよ』と、藍香がジェスチャーでどうにかみんなに伝えた。

どうせならこっちまで来て小声で話せばいいのにと思ったが客の事を考えてすぐにそれは消えた。

「5人とも……そろそろ時間だから位置について。それと楽しんできてね。」

双葉さんが小声でそう伝えた。

「「頑張ってきます」」

全員の息が合った。一人がジェスチャーという事を除けば。

私達は自分たちの楽器のもとへと散らばった。双葉さんはそれを確認すると舞台そでから出ていってしまった。

そして、ついにこの時がやってきた。

「皆さん、大変長らくお待たせしました。それではまず初めに、軽

音楽部『チュート』の演奏をお聞きください」

そういえば言い忘れてたけどバンド名の『チュート』っていうのは上条が考えたもので、『チュート』っていうのを

思い付いたきっかけはと言うと、ゲームによくチュートリアルとかいうのが出てくるとか言って、それをもじったらこうなったそうだ。

最初はこの案は撤回されたが、『キュート』になんか似ていて可愛いという理由からと、あまりいい案が浮かばなかったためこれに決定した。

とか言っている間にも、暗幕が中央から横に開いていった。

私は客席を見て息をのんだ。想像していたよりも客がたくさん入っていたからだ。

そして、藍香のMCによってライブが開始された。

「と、いうことで今日はお疲れ様でした」

咲が額の汗を拭いながら笑った。

「おつかれさん」

上条が疲労困憊したような表情で返事をした。

「ほんと今日は楽しかったね。でも最初に健が音を外したときはひやひやしたな」

「ああ・・・もうその話はしないでくれ・・・ただでさえ疲れてるのに、俺の精神に追加ダメージが」

上条は背中のギターバッグを重たそうに背負っていた。

藍香が咲にさっきの事を尋ねた。

「咲、そういえばさっきメインのバンドの人たちに褒められてたよね」

「そういえば、そうだったね。なんでもドラムの魅せかたがうまいだのって言われたのかな」

「すごいね、咲は」

藍香は尊敬の眼差しで咲を見ていた。

「あゝ・・・えっと、そろそろ帰っていいか？疲れたんだけど」

上条は相当疲れているらしく、後がない老人のように今にも倒れそうであった。

「そうだね、そろそろ解散するか」

咲が周りを見渡してそう言った。もう、客は全員帰っており双葉の店の前にいるのは私達だけである。

「よし、じゃあ解散」

上条はすぐさま解散令を出した。そして皆が「おつかれ」という言葉をかけながら散らばっていこうとした。

だが私は今日だけはすぐに解散する予定ではなかった。

「ちょっと待って!!」

誰に言ったかも分からないよなそれは家に帰ろうとする全員の足を止めた。

「なんだよ野宮、まだなんかあるのか？」

最初に愚痴り始めたのはもちろん一番帰りがっていた上条であった。

「えっと、その大事な話があるの・・・藤田君に」

その言葉で藤田の体がこちらに向いた。

「なに、みや？」

もちろん藤田は穏やかな表情でいた。しかし、私は逆に顔が青ざめていくのがわかる。

「えっと、そのね・・・」

「何？言いたいことがあるんなら早く言っちゃいな」

咲がにやにやとした表情を浮かべながら急かしてきた。咲には次に出る言葉が分かっているんだと想像する。

その間、私には今朝母の言った言葉が蘇った。『ここぞって時は頑張るなさい』・・・

ああ、お母さん頑張るってこういう事なんですね、正直もうなにかに押しつぶされて死にそうです。

「えっと・・・す、す・・・」

「？」

「・・・すっごく楽しかったです、今日のライブ！」

大声を発した後は微妙な静けさに包まれた。

そして藤田の少し前にいる咲は眉間に皺をよせており、口パクと首の動きに私に何かを伝えようとしていた。

「そうだね、楽しかったね」

そして周りを見渡すと、メンバーの一人が欠落しているのに気が付く。いつのまにか藍香が消失していた。

上条の死にそうだった目は、珍しいものを見るような丸い目になっていた。

そんな空気を読まない上条を咲は振り向きざまに腹部に鉄拳を下した。

そして上条はその場に腹を抱えて崩れ落ちた。

「えっと・・・何ていえばいいのかな・・・こういう時は返事を言った方がいいのかな」

藤田が見えない位置で咲が上条の肩に手を置きながら頷く。

「そうだな・・・僕も・・・みやの事が好きだよ」

その言葉で私はすべてが報われたような気がした・・・かな。

|

その後、色々と問題が発生。

例えば藍香のケース

良く頑張ったね和枝え。私は出来るって思ってたよ。

え？なんであの時逃げたかって？それは、和枝を見てるのが楽しいからだよ。

それと私が、なんで藤田君に告白しなかったの？と思ってるでしょ。まずそこが間違いなんだよね。第一私は藤田君の事はホントに好きじゃないんだよ。

いやあゝ、和枝と筆談してるときにあればホントに迫真の演技だったなあ。

カンヌで女優の賞とか貰えるんじゃない？

まあ、ああでもないかと和枝は告白できないでしょ。

上条のケース

お前度胸あるな・・・俺は絶対あんなことできねえわ。

俺も好きな人がいるんだけど今度やってみよっかな。

って・・・今はもう無理かな？なんてな。

咲のケース

殿々、とうとうやりましたな。

私は最初っから殿が將軍の首を討ちとってくれると思っていました。

今までの数々の無礼をお許してください。

ていうお遊びは置いといて、よく頑張ったね褒めて遣わすぞ。って
変わらないか。

そして、藤田君のケース

いやあ、いきなり言われた時はびっくりしたよ。

実は僕も歌詞を渡す時に言おうと思ってたんだけど

言うタイミング逃しちゃってね、でもまさか最初に言われるなんて
ね。

結果よければ全てよしってこの事なのかな。

じゃあ、これから短い付き合いか長い付き合いか分かんないけど、

今日から改めてよろしく。

||
||
||
||
||

ということで、色々あったけどなんとか私は春を掴むことができました。

これで分かった事は、声で出して伝えるってことはとっても大切って事ですね。

じゃあ長く付き合えるように頑張っていきます。

第4話：思いの果て・・・（後書き）

なんだかんだいってやっぱり4話で終了しました。

文とか色々拙いですが最後まで見てくださってありがとうございます。

この続編的なものも考えているんですが、同時進行で作っていた別の話が終わったらやろうかと思っています。

ということで次回作は推理のジャンルでこの5人のお話をやっているかどうかと思います。

本当にここまで読んでくださってありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9951f/>

姉妹と静けさと音

2010年10月15日21時31分発行